

## 「自分の義と神の義」

2018年10月06日

ローマの信徒への手紙 9章30節～10章4節 では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。「見よ、わたしはシオンに、／つまずきの石、妨げの岩を置く。これを信じる者は、失望することがない」と書いてあるとおりです。

兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために。

パウロはローマ教会に宛てて言葉を尽くしてキリストの福音を語っている。その時、自分の語ったことに対し、疑問を持つであろうことを予想し、自らが問いを出し、それに答えるというユダヤ人の用いる論法で解き明かしている。「では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。なぜですか。」怒りの器として滅びることになっていた異邦人がキリストの福音を受け入れたので、神は憐れみの器とされ、ご自分の豊かな栄光を彼らにお示しになった。一方、イスラエルは神の子としての身分、契約、律法、約束を受けていたにもかかわらず、キリストの福音を拒否しているので、神の栄光を受けることができない。どうして、そのようなことになったのかと設問している訳である。義を知らなかった異邦人は、行いによらず、ただキリストを信じる信仰による義を得た。福音の喜びを丸ごと受け入れたのである。

イスラエル人は、行いによって義に達せられると考え、律法を守ることによる義を追い求めたが、律法によっては義に達することはできなかつた。こんな善いことをしましたので、神様、私をお認めくださいという道筋はない。イザヤは「主なる神はこう言われる。『わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みを経た石／堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。信ずる者は慌てることはない（イザヤ書 28：16）』」と語った。パウロは、シオンに堅く据えられた隅の石をつまずきの石と見なし、「これを信じる者は、失望することがない』と書いてあるとおりです」と、つまずきの十字架を信じる者は、「慌てることはない」を「失望することはない」と言い換えて、注解している。

パウロは「兄弟たち」と呼びかけ、私は神の民イスラエル人が救われることを心から願い、彼らのために神に祈っていると語る。パウロの切なる祈りである。しかし、彼らの間違いを指摘している。「わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。」正しい認識とは、自分で義を立てるのではなく、神の義を知って、神の義に従うことである。人間はどんなに正しく生きようとしても義に与ることはできない。神は、主イエスの十字架の赦しを信じる者を、無償で義（是認）としてくださる。キリストは信じる者すべてに義をもたらすために、律法の終わりとなられたのである。キリストの福音は自分自身へのこだわりからの解放である